

●ヒンドゥー寺院 神々の器

田中雅一

●さまざまな寺院

タミル・ヒンドゥーの社会は寺院を中心に組織されている、といっても過言ではない。多くのヒンドゥーの神々を祀る寺院はけっして観光の対象ではなく、まさに生きた信仰の対象となる宗教施設である。彼らの生活を知りたければまず寺院に足を運ぶことだ。そして、そこに集まる人がなにをしているのか、どんな供物を用意しているのかを見てほしい。運が良ければ年に一度の祭りに立ち会うことができるかもしれない。

ヒンドゥー寺院はいくつかのタイプに分類可能だ。まず常勤の祭司がいるかどうか、祭司が菜食かそうでないか、毎日礼拝がなされるかどうか、年に一度の祭りがあるかどうか、などでランクが決まる。しかし、祭司のいない祠でもそこに祀られている神は強力だ、と信じられている場合もある。だからけっして見かけが神の力に対

応している、というわけではない。また寺院の外観についても、建立儀礼を行い聖化された建物か、伝統的な寺院建築様式に則ったものか、などが問題となる。人が入れるほどの建物があっても中には神像が置かれていない場合もあれば、大樹の下に神像だけあって吹きさらしになっている場合もある。タミル語ではどちらもコーヴィルと呼ばれるが、ここでは寺院と小祠と区別しておこう。

●村の寺院

わたしが滞在していたタミル漁村シャッティユールには四つの寺院と四つの小祠があった。また村の回りにはやはり四つの小祠と三つの寺院があり、村人たちの日常的な信仰の対象となっていた。四つの寺院のうち三つが村で共同に管理されている。パールタサーラティ(クリシュナ)とドラウパディ女神を祀る寺院、カーリー女神寺院、マリー女神寺院である。もう一つは村の裕福な家

族が建立したアイヤナール寺院で、いまはその子孫たちが管理者となっている。これらには少なくとも年に一度の大きな祭りがあり、また毎日礼拝がなされている。ただし祭司に関しては菜食のブラーマンが礼拝を行うパールサラーティ寺院、アイヤナール寺院と、そうでないパンダーラムという肉食の祭司が礼拝を行うカーリー女神寺院、マリー女神寺院とに分かれる。

村にある四つの小祠は、一つだけが村の共同管理となっているが、祭司はいないし、毎日の礼拝もない。ただし祭りの時はパンダーラムが祭祀をする。他のは個人で管理されている。彼らは参拝者に依頼されれば、即席の祭司となる。

祭司が菜食かそうでないか、という差は寺院での祭りの様式を決定しているといつてよい。すなわち、菜食のブラーマンが関わる寺院祭祀では菜食の供物だけが供えられるのに対し、菜食でないパンダーラムのようなカーストの祭司が関わる寺院祭祀では動物の供儀くぎがなされ、また神々の憑依ひょういも行われる。

●寺院の構造

スリランカのヒンドゥー教徒の大半はシヴァ派に属す

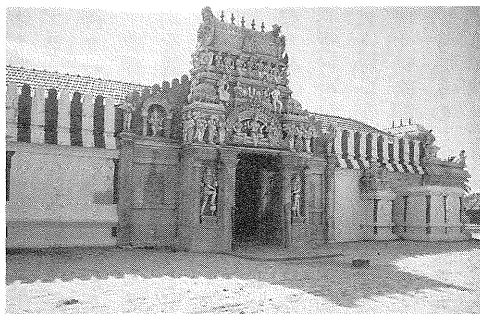
る。このため寺院もシヴァ神や彼に密接に関係している神々、すなわち息子のガネーシャやムルガン、配偶者の女神たち、それからシヴァの別名をもつとされる神々を祀る寺院が多い。また一つの寺院には主神だけでなくその配偶神や子供たちが一緒に祀られている。タミル・ヒンドゥーの間で一番人気があるのがムルガンであり、その聖地カタラガマへの巡礼は重要な宗教行為である。

主神でなくとも、寺院にとくに欠かせないのはガネーシャである。彼は嫉妬深いため、なによりも最初に礼拝をして尊敬の念を表明しなければならぬ。彼はこれに応えて儀礼が支障なく行われるように、あるいは願いが叶うように障害物を取り除いてくれると信じられている。彼に礼拝した後、寺院を右回りに回る形で主神に参拝する。

●日々の礼拝

寺院でなに行われているのか。人びとは寺院でいたいになに行うのか。そもそもどうして寺院に参拝するのだろうか。

祭司がいる寺院では毎日の礼拝（プージャ）が重要である。一日に何回礼拝を行うか、どんな供物が用意でき



村のヒन्दウ寺院。



カーヴァディ。

るかは、資金や格式によって決まってくる。インドにあるような巨大な寺院では一日六回、朝から夜中近くまで礼拝がなされる。シャッティユールでは午前十一時ころと午後六時ころの二回が基本であった。礼拝は祭司が神像に対し礼を尽くし、供物を供える行為からなる。その目的は世界の安寧、宇宙の秩序の維持といった公的なものである。

礼拝は神々と人びととの交流の場でもある。私的な願い事も祭司を通じて行われる。礼拝時神々の力は増し、効験も大きい。樟脳しょうのうの炎で照らされた神々を見(ダルシヤン)、祈る。寺で用意された供物(ナイヴェーディヤ、主としてご飯類)は、一旦神々に供えられた後、参拝者たちに分配される。これはプ拉萨ーダム(おさがり)と呼ばれ、神の力が宿っていると信じられている。これには供

物だけでなく、礼拝で使用した水や聖灰なども含まれる。ブラサーダムを食べたり、体につけたりして参拝者は神々の力を取り込むのである。

参拝者たちは事前に個人的な供物を用意し、これを祭司を通じて神に供えることもある。これはアルチャナと呼ばれ、ナイヴェーディヤとは区別される。アルチャナにはココヤシの実やバナナ、その他の果物が含まれる。

祭司は公的な礼拝が終了した後、アルチャナを参拝者から受け付ける。参拝者の名前を唱え、供物を捧げ、すぐにその一部をブラサーダムとして参拝者に返す。アルチャナは祈願に必要な手続きというよりは、感謝の意を表明するもの、という意味合いが濃い。それはつぎに説明する奉納（感謝の）儀礼の一つと考えるのが妥当である。

●奉納儀礼

人びとは、病氣やけがからの快復、係争での勝訴、入学試験や就職での成功、長旅の安全などを求めて神々に祈願する。祈願がうまく成就すると、その感謝を表現してさまざまな儀礼行為や寄進を行う。こうした行為は祈願の時に願かけとして宣言するのが一般的である。つまり、祈願の時に「病氣が治れば寄進をします」というふ

うに神に語るのである。したがって、人びとは約束を守って儀礼的所作をするといえる。こうした所作をここでは奉納儀礼とよぼう。

奉納儀礼には、たんに寺院に参拝して簡単な供物を供えるものから、祈願した神のために新たに寺院を建立し、定期的な祭祀を執行させる場合までさまざまなものである。奉納儀礼は願かけが成就した後なされるが、一般にそれは寺院の祭りの時など特別の日に合わせて実行される。ここではそうした儀礼の典型的なものとしてカーヴァディを紹介しよう。

カーヴァディは通常男性が行う奉納儀礼である。彼は願いが成就すると、神のところまでミルク壺を運ぶという巡礼を行う。それは家からの場合もあれば、寺院に着いてから、寺院の周りを回る場合もある。

ミルク壺は天秤棒の両端に吊るすようにして運ばれるが、この棒にはアーチ型の覆いがついていて、孔雀の羽や色鮮やかな紙片できれいに飾り付けられている。奉納者はこれをついで、ミルクを神像の安置されているところまで運ぶ。このミルクは後で神像の灌頂（かんぎょう）に使用される。

●供犠の論理

以下ではカーヴァーディの起源とされる神話を紹介しておこう。

あるとき聖者アガステイヤが、ヒマラヤに住むシヴァ神より二つの丘を授かった。聖者はイドゥンバンというアスラ（魔神）に命じて、この丘を南インドに運ばせることにした。アスラは二つの丘を棒に吊るして南へ向かい、その途中現在の南インド、タミルナードゥ州にあるパラニというところで丘を置いてすこし休むことにした。休憩後再び丘を持ち上げようとしたが、どうしても動かすことができない。イドゥンバンが不審に思つてあたりを見回すと、一人の少年が立っていた。丘を持ち上げるのでできない自分をあざ笑っているようにみえたので、イドゥンバンは懲らしめてやろうと少年に襲いかかったところが反対に、イドゥンバンは一撃で殺されてしまう。というのも、この少年はシヴァ神の息子ムルガンだったからである。イドゥンバンの死を伝え聞いた彼の妻イドゥンバニは、ムルガンに夫の蘇生を祈った。ムルガンはその祈りに心をうたれ、イドウ

ンバンを蘇らせた。こうして、イドゥンバンは自己の愚かさを恥じてムルガンに奉仕することになったのである。今日イドゥンバンは、パラニ丘の頂上にあるムルガン寺院の門番として、小祠に祀られている。

イドゥンバンと同じように、天秤棒をかついでパラニのムルガン寺院に参拝する奉納者たちは以上の神話を演じているといえる。ここで興味深いのは奉納者たちがまずアスラに自分たちをなぞらえているという事実である。

ここでもう一つ別の神話を紹介する。

神々とアスラたちが壮絶な戦いを演じていたころ、ムルガンはタミルナードゥ州のティルチェンドゥールという海岸までアスラの帝王スールパドゥマを追いつめた。彼はムルガンの率いる神々の軍勢との戦いが自身に不利であるとして取り、海に潜って大きなマンゴーの木に変身した。これにたいして、ムルガンはヴェールという槍に似た武器を投げて、

この巨木をまっぴたつに裂いた。裂けた木の一方が雄鶏となり、片方が孔雀となった。ムルガンは両者を慈悲によって手なづけ、かくして雄鶏はムルガンの旗に、孔雀は彼の乗り物となった。

この神話に従うと、孔雀の羽飾りをつけている棒をもつ奉納者たちはムルガンの乗り物である孔雀を演じているともいえる。そして、彼らの身体には、ムルガンがアスラを倒した時に使った武器ヴェールのミニチュアがたくさん刺さっている。つまり、ここでも奉納者たちはムルガンに殺害されることによって、一番近い存在として救済されるアスラを演じているといえる。

つまり、奉納儀礼は、本来現世利益的な動機に基づいて始まった神と人との交渉過程の最後にあたる、仕上げともいえる儀礼的行為だが、ここで問題となっているのは、アスラとしての自己をムルガンに捧げ、象徴的な死を通じて救済されるというきわめて自己否定的な意味合いを核としているということである。カーヴァディには死を通じての救済の観念が明白に読み取れるのである。

同じ観念はカーヴァディほどはっきりしていないにし

ても、ほかの奉納儀礼にも認められる。というのも、患部の一部や失せ物の品物を象どったアルミ板を奉納したり、授かった子供の髪を剃って奉納する、ということも自傷行為ではないにしても、象徴的には自身の一部を差し出す、供儀と解釈できるからだ。供儀はたんなる物を媒介とする神と人との交流ではない。そこには供儀を行う者の身代わりとなっている媒介物の破壊行為が認められる。したがって、象徴的な自己への暴力を通じて人は神と交流するといえよう。

●祭りの意味

奉納儀礼は個人的な儀礼であり、いつ行ってもかまわないが、普通は寺院の祭りの日になされる。なぜ祭りの時に行われるのかというと、その日に神が勸請かんじようされ、そのシャクティ(力)が寺院に充溢するからだ。

寺院での儀礼や祭りのあり方、そして寺院そのものの存在理由は、ヒンドゥー教の神観念と密接に関係している。ヒンドゥー教の神々の本質はシャクティである。この力は、人びとの能力をはるかに超えたものだ。人びとが神に祈るのは、この力を得て自分の生活の向上に利用したいからだ。しかし、問題はそれをうまく利用するた

めに手続きが必要だということだ。それがないとこの力は強力すぎて、かえって危険である。寺院やその中に安置されている神像はこの危険な力を緩和する容器といえる。そして力をこれらの容器へと導き、形を与えて人びとに利用できるようにするのが儀礼である。

神像を容器と考えるなら、たとえ神像があっても、そこにシャクティたる神がいまいというかもしれない生じる。寺院にシャクティを充満させ、危険でない力に変容させ、その恩恵を得るために定期的に祭りが行われる。祭りによって神（シャクティ）が勧請され、馴化じゅんかされる。

人びととの交流が可能となる仕掛けが用意され、祭りの最後には再びシャクティは去っていく。

聖地や寺院では独自の伝承に基づいて個別の祭りの日を決めていて、その日に盛大な祭りがなされる。大寺院の祭りのハイライトは、巨大な山車の巡行である。また神々の結婚や魔神との争いなども演じられる。実際観光ガイドや観光局のポスターから知ることのできるのは、こうした祭りである。

大寺院でなくとも、事情は似通っている。ふだんは訪れる人のいない村の寂れた寺院においても、年に一度神

を盛大に迎える祭りが行われる。神を勧請し、供物を供え、縁起が数日間にわたって語られる。ただし、村の祭りのハイライトは山車の巡行ではなく、火渡りなどの苦行である。また、神の性格によってはヤギや鶏が殺されて供えられる。ときにはシャーマンのような霊能者が神憑り状態になってお告げをする。霊能者だけではない。一般の村人たちも神憑り状態になることがしばしば観察できる。格式のある寺院ではほとんど見られることのない光景である。

北部や東部のヒンドゥー寺院の多くは、一九八四年以後激化した民族紛争のために破壊されたり、また難民の避難所に使われたりして、本来の宗教的な役割を急速に失いつつある。治安および経済状態の悪化によって祭りはおろか日々の礼拝も困難となっている。シャクティはいつのまにかどこかに立ち去ってしまったのかもしれない。しかし、西部のヒンドゥー寺院では多数の仏教徒たちが参拝し、新たな共生の可能性が模索されているのも事実だ。わたしはそこにこれからのスリランカの可能性を探りたい。